

2020 年度 関西学院高等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。また、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、教職教育研究センター教員、千里国際中等部・高等部校長からの第三者評価／学校関係者評価をいただきました。

関西学院独自の評価項目として「キリスト教主義教育の実践」を設定し、学校評価ガイドライン（文部科学省、平成 28 年改訂）で示された学校運営における 12 分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」、「生徒指導」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「教育環境整備」、「人権教育」を設定して実施しました。また、昨年度より文部科学省から採択を受けたワールドワイドラーニングコンソーシアム支援事業に関連して「国際理解教育」を継続しました。また、昨年度からはアンケート調査に関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”についての質問を「学院共通項目」として、今年度は「学校のコロナ禍についての対応」についての質問を設定しました。

2020 年度の学校評価実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒 98.9%（前年度回収率 99.4%）、保護者 73.0%（前年度回収率 73.7%）、教員 100%（前年度回収率 100%）でした。

今年度も、各項目の生徒・保護者・教員からのアンケート結果を参考に、現状の説明・評価・分析をいたしました。そこから見出せる高等部の課題を明らかにして、第三者評価者の評価を基にしながら今後の改善につなげていく所存でございます。

2021 年 3 月 19 日
関西学院高等部
部長 枝川 豊

学校評価

教育理念・使命・目標

高等部の教育目標は「イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う」としている。礼拝、聖書科授業、宗教的行事を通してイエス・キリストから生き方を学び、又その学びの目的を他者に対して仕えるためであるという関西学院のモットー「Mastery for Service」を体現する世界市民の育成をめざす。一貫教育を柱として、大学で学ぶ力を身につけ、多様な社会の要求に応えうる総合的な人間力を養う。

2019 年度、文部科学省より拠点校として採択されたワールドワイドラーニングコンソーシアム支援事業（WWLC）事業を軸に Society5.0 時代に生き抜き、平和な社会を築く担い手としての世界市民を育成をする。

2020 年度の評価項目

- キリスト教主義教育の実践：高等部の教育の根幹をなすため、毎年の評価項目として設定している。
- 教育課程・学習指導：重要項目であり、生徒の「学び」が確かなものになっているか、そのためのカリキュラム編成になっているか、検証のために評価項目として設定している。
- 生徒指導：規律ある生徒の生活環境、および安心して学べる生活環境が整えられているかを検証するために評価項目として設定している。
- 教育環境整備：共学化になり引き続き生徒数増加、女子生徒の入学に対応するための設備を整備することは重要であり、快適な学習環境を保証するために評価項目として設定している。
- 人権教育：重要項目であり、グローバル社会において人権を尊重し、多様性が受容される環境が整っているかの検証のために評価項目として設定している。
- 国際理解教育：WWLC 事業を通して生徒の国際理解を深めるため、評価項目として設定している。

2020 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の理念の共有・実践】	自己評価	A
目標	建学の精神の体現。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ● 生徒のキリスト教に関する理解の向上を目的とした活動を今年度も引き続き行った。その結果、生徒(問4)「高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う。」で肯定的な回答を 75.6% (昨年度 72.1%)、生徒(問5)「礼拝の時間は大切だと思う。」で 68.2% (昨年度 68.9%)、生徒(問6)「聖書の言葉は共感できる部分がある。」で 73.7% (昨年度 71.9%)を得た。昨年度と大きな差は出ていないため現状維持と理解する。このアンケート調査を開始してから、大きな数字の変化はない。それは、高等部のキリスト教主義教育のフォームが確立しているからだろう。 ● 自由出席である早朝祈禱会（火曜日 8:10）の出席状況の向上を毎年目標としているが、平均出席 73.0 名（昨年度 125.7 名）と減少した。これはコロナ感染拡大の影響だと考える。しかし、このような状況下にあっても、共に祈りを合わせられたことは感謝である。 ● 学校外のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）との連携・関心を高めるため、「人吉市・芦北町を中心とした大雨による九州南部豪雨災害のための献金」、学童保育、キリスト教会が主催する地域活動での奉仕、コンタクトレン 		

	<p>ズケースのリサイクルなどの活動を行った。その結果、生徒(問7)「高等部は、キリスト教関連団体(教会・ボランティア)に関心を持っている。」で肯定的な回答が69.1%(昨年64.9%)と現状維持をしている。ボランティア委員会には、現在29名の委員がいる。</p> <p>● 保護者が回答した問4「高等部が実施しているキリスト教主義教育は、子どもの人間的成長に寄与している。」の肯定的な回答の割合は82.6%(昨年83.0%)と多くの保護者が昨年同様強い関心を示した。保護者の方へのキリスト教理解の取組の一環として、保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」を行っている。その出席者数も現状維持をしている。</p>
今後の方策	<p>● 現状維持という評価を受けて、現在、確立されているフォームをベースにしつつ、さらにチャペルのあり方、キリスト教行事の工夫などの検討を行う。</p> <p>● コロナ禍で、近隣教会の牧師をお呼びしにくい状況にはあるが、関西学院内のクリスチャン教職員に今以上に奨励を依頼し、魂の育成に励む。</p>

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【大学進学のための基礎学力と、受験にとらわれない学びの徹底、新しい時代に対応した主体的な学び、探究型の学びの実践】	自己評価	A
目標	<p>● 接続する大学で主体的に学ぶ力を保証し、多様化・不安定化する社会の要求に応えうる総合的な知識や学びの姿勢を習得する。具体的には1. 基礎学力の向上、2. 興味や関心に応じ深く学ぶ、3. 知の統合を目標として掲げる。</p> <p>● その中で学習に躓きのある生徒への補習などきめ細やかな対応をする。</p> <p>● 教育課程や接続する大学への進路ガイダンスを適切に行う。</p>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <p>● 年度当初からの休校措置下で、5月よりiPad(今年度より全生徒必携化)とZoomを使用したオンライン授業を実施したが、その際、実技科目を含む全ての科目で実施。また、一方的な講義にならないよう、資料読解やワークなど生徒の作業を取り入れるよう各教科に要請した。</p> <p>● 2年生の必修選択の枠で、WWL科目としてAI活用、ハンズオンラーニング、グローバルスタディの3科目を設定。自主的な学びや探究的な要素を多く取り入れた授業を行い(オンライン授業から実施)、試験を行わずに日々の学びの振り返りやプレゼンテーションなど、新しい評価方法にも取り組んでいる。</p> <p>● 英語や数学が苦手な生徒対象に開講している特別授業や、英語、数学、国語に関して宿題が未提出の生徒、あるいは小テストにおいて基準点を満たさなかった生徒に対して放課後に行う居残課題という取組を数年続けている。</p> <p>● 1年生の英語の成績不振者に対して関西学院大学生をチューターとしてサポートするメンター制度は、新型コロナウイルス感染症のため大きく予定を変えざるを得なかったが、3学期より運用を始めた。</p> <p>(取組の効果に対する評価)</p> <p>● 長期の休校措置という未曾有の状況下で、手探りでオンライン授業に取り組む際に、受験にとらわれない学びを前面に押し出した。生徒においては問13で内容の興味関心について肯定的な意見が昨年よりも増えて80%を超えた。</p> <p>● オンライン授業も含め、教員は受験にとらわれない学びを各自前面に押し出したことに対しては、生徒においては問11(授業内容の理解度)、問12(分かりやすい工夫)でいずれも肯定的な捉え方が昨年よりも増えている。</p>		

	<ul style="list-style-type: none"> ● 授業内容への興味関心や理解度、授業方法の工夫への肯定的な意見の増加から、生徒の基礎学力向上には一定の成果が継続的に認められる。 ● 英語や数学が苦手な生徒対象に開講している特別授業や、英語、数学、国語に関して宿題が未提出の生徒、あるいは小テストにおいて基準点を満たさなかった生徒に対して放課後に行う居残課題という取組を継続して実施している。生徒においては、問15「補習や課題は適切に行われている。」で肯定的に捉えている割合がほぼ前年並みの水準となった一方で、保護者においては問8「高等部は、補習・選択授業を通じ、生徒の個性・能力に応じた学びを展開している。」で前年を下回って70%を切っており、オンライン授業における課題や学校での補習、宿題等が家庭では見えにくい仕組みになっていることが想定される。高校生という年齢を鑑みて生徒の自主性を大切にしつつも、保護者への説明も一定の必要性がある。 ● 教育課程や接続する大学への進路ガイダンスについては、新型コロナウイルス感染症のため従来通りの時期に行えず、特に3年生については卒業生による学部紹介が実施できなかった。生徒においては問8「高等部から進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に受けている。」でおよそ90%の生徒が肯定的に捉えており例年よりも高い水準を維持できているものの、保護者においては問10「高等部は、接続する関西学院大学に関する情報を適切に提供している。」で肯定的にとらえている割合が昨年を下回って80%を切っており、保護者向けの情報提供の機会を適切な時期に設ける必要がある。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ● 基礎学力向上の取組は大前提として継続しつつ、特に学力下位層に向けた補充については、2年生の必修選択で数学と英語に補習科目を新設し、3年間切れ目のないフォローをしていく。 ● 主体的な学び・探究型の学びについては、WWLコンソーシアム構築支援事業が3年目を迎えるので2、3年のWWL科目の実践とその評価を通じて、方法論や評価のノウハウについて蓄積・普及を続ける。 ● 教育課程や進路についての説明は、保護者も含め時期・内容を改めて検討する。特に関西学院大学の推薦については、大学側のオープンキャンパスの見直しもあり、情報提供の時期や内容を高大接続センターと連携して再構築する。

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【自主性を育み、気持ちよく学校生活を送るための生活指導徹底】	自己評価	A
目標	学校生活のルールを守り、他者に気遣い、規則正しい生活習慣を養う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 新型コロナウイルス感染拡大防止に対しての取組から始めるという今までに経験したことのない学校生活を4月から6月半ばまで送ることになった。 ● 特に新入生への注意喚起等は例年通りに実施することが出来ず、特にスマホ等SNSの利用に対する注意喚起が数少なく不安は否めない状況であった。 ● 1年を通して感染防止策に追われたが、できる限りの指導ができるよう生徒部として心掛けてきたことは以下の通りである。 ● 時間厳守の徹底（特にクラブ活動時間）と換気推奨。 ● クラブ活動における練習規定の制定。 ● 学校行事開催時における感染防止対策の徹底。 ● ICT関連の指導として1年生のみ、各クラスごとに動画をもとに事例を紹介 		

	<p>介し利用の際の注意事項を伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 登下校中のマナー向上を伝える機会を増やす。また学年毎の集会在認められるようになってからは、生徒部より注意喚起を促した。 ● 制服着用の着こなしや自転車通学者対象についてのマナー指導を行った。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 新型コロナウイルス感染対策について、教員はもとより、生徒たちの理解、協力を深めることができたことから校内におけるその防止策の徹底を図ることができていると認識している。 ● 自転車通学者における校内でのマナーの向上はみられるが、校外での乗り方等指導の必要性はある。 ● 服装に関し多くの生徒が制服の意味を理解し、プライドを持って着用、特にブレザーの着こなしについてはボタンをとめて着用することが定着している。 <p><学校評価アンケートより></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保護者、生徒においては概ね前年度より評価を得ていると推察されるが、特に生徒対象の間 20「守るべき高等部生活のルールやマナーが明確である。」については、14.5%アップ（今年度 80.5%、昨年度 66.0%）していることから、周知の仕方が分かりやすくなっていると受け止め、さらに明確化できるよう努めていきたい。 ● 教員の集計結果において問 26「高等部は生徒の問題行動などの早期発見に努め、教員間での情報の共有を図っている。」について-5.2%（今年度 83.0%、昨年度 88.2%）の結果が出ていることに際し、情報共有の仕方を再考していく。 ● すべての項目において前年度を上回るよう学期最初のオリエンテーションに注力をしていく。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ● 引き続き新型コロナウイルス感染防止に対する注意喚起を徹底し、皆が安心して学校生活を過ごせる環境の提供に尽力していく。 ● 服装の乱れが学校生活の秩序の乱れに繋がらないよう指導の徹底を図る。また、登下校中のマナーアップキャンペーンを実施する。特に、公共交通機関におけるマナーに気を配っていく。 ● 気持ちよく挨拶できるよう、教員からの声かけも多くしていく。 ● 集団生活における「個」の自覚を促し、他者への気配りができるよう導く。 ● 人権教育と連携しいじめのない、心地よい学校生活を過ごせるよう取り組む。

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【共学化に伴う学校設備の改善】(重点)	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> ● 引き続き、男女共学、定員増に対応した施設・設備の充実を図る ● ICT・アクティブラーニングなどを活用した、新しい時代の教育に対応できる教育環境をハード・ソフトの両面において整備する。 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 引き続き、生徒・保護者・教員の意見を聞きながら校舎の整備と維持・管理を行った。今年度は、体育館における熱中症対策として、これまで懸案であった空調設備を新設した。また、生徒総会の議題となる程、更改が待たれていた高等部棟の空調設備の更改も実施予定であったが、コロナ禍による学校スケジュール変更に伴い延期となった。来年度更改に向けて準備中である。 ● ICT環境整備については、年次進行してきた1人1台タブレット環境が、今年度で全学年整うこととなった。奇しくもコロナ禍における各種オンライ 		

	<p>ン対応に丁度間に合った形となり、緊急連絡やオンライン授業等にも比較的スムーズに対応できた。機器・ネットワークの運用や、生徒・保護者へのサポートが十分に行えるかが懸念されたが、常駐のICT支援員のサポートのおかげで順調に推移している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● S G H(スーパーグローバルハイスクール)事業の後継である、W W L C (ワールドワイドラーニングコンソーシアム) 支援事業拠点校としての活動も2年目に入った。新カリキュラムのもと、ICTを用いたアクティブラーニング型・P B L (Project Based Learning) 型・教科横断型授業を展開している。1. 2. のような「ハード面」だけでなく、3. のような「ソフト面」での教育環境についても整備を続けてきた。 <p>(取組の効果に対する評価：上の1～3に対応)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 結果として、今年度も高等部の教育環境整備全般について、生徒(問23～26)、保護者(問16～17)、教員(問28～33)ともに90%に近い高い肯定的評価を示している。本校の教育環境の整備が順調に進められていると判断して良いと考えている。 ● ICT環境の整備・運用について順調に推移していることは、このコロナ禍においても、生徒(問25～26)・教員(問32)からのICT環境への肯定的評価が90%を超えていることから確認できる。全学年1人1台環境に合わせて新設した質問(生徒の問25/教員の問34:「高等部は生徒1人1台端末(iPad)環境を有効に活用している。」)についても、生徒で83.8%、教員で94.4%が肯定的な評価をしている。また、引き続き、核となる教員は外部の研修会等に講師として招かれ、教員のICT運用能力の向上についても、昨年度と比較して向上(問35:84.3%→87.0%)している。 ● 2. のICT環境の整備と合わせて、全国から200名を超える教員を迎え「探究学習×ICTカンファレンス2020」と題したイベントを高等部にて開催し、実践報告をベースとした教員研修の場を提供した。全国の教員に高等部の教育環境の「ソフト面」について報告し、様々な意見交換ができたことは非常に有意義であった。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ● 施設整備については、これまでと変わらず、現在の充実した施設・設備の良好な維持、管理を行う。それと共に、改めてダイバーシティ・インクルージョンの視点で施設のチェックを行い必要な整備を進めていきたい。 ● ICT環境については、全学年がタブレットを持つ状況でのより安定的かつ効率的な運用を目指す。 ● W W L 事業を起点に、アクティブラーニング型授業・P B L 型授業を実践する教員を後押しする体制を整え、高等部らしいアクティブラーナーを育成していく。教育内容というソフト面の深化と共に、それを支えるハード面での環境も最適なものが生徒に提供できるよう、今後も情報収集と実践・各種検討を進めていく。

評価項目 【テーマ】	【教科教育・キリスト教教育と連携した 人権プログラムの策定と実施】(重点)	自己評価	B
目標	<ul style="list-style-type: none"> ● 能力・資質にかかわらず、神に愛されている存在としての自尊感情を培う。 ● 日常に潜む自他への人権侵害(いじめ, 暴力, 偏見)に対し、毅然として立ち向かう人権感覚を持つ。 ● 国籍、人種、民族、出身地、宗教、身体的・精神的特徴、セクシャリティの多様性(ダイバーシティ)を受け入れる柔軟で幅広い人間観を持つ。 		

	<ul style="list-style-type: none"> ● 貧困、差別・偏見、抑圧など、社会的不公正による人権侵害に関心を持ち、虐げられている人々に対する共感的視点を持つ。 ● 歴史的視野に立って過去を謙虚に見つめ、平和を希求しこれを作り出す歩みに参加する。
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 新型コロナウイルス感染拡大に伴う休校や時差登校の中、例年実施しているプログラム内容や実施方法の大幅な見直しを迫られた。6月末から7月にかけて、ようやく1年生対象の「多様性」をテーマとするプログラムを実施したが、教室内でのグループワークや、学年全体を集めるレクチャーが実施できなかった。様々な検討を重ねた結果、各自が所有する iPad アプリのアンケート機能を活用して個人ワークシートの結果を集計し、そのフィードバックを音声付き動画で配信し、各ホームルーム教室でプロジェクター投影をおこなうに至った。 ● 学年を分割し、密を避けて視聴覚教室に着席させて複数回レクチャーを実施するなど、様々な試行錯誤が続いた。2学期には少し状況が改善し、3年生対象の「こどもと人権」をテーマとするプログラムや、2年生対象の「多様性を考える～障がい者問題を中心に～」を実施した。2年生のプログラムでは、昨年同様、近隣の障がい者自立支援センターで介助スタッフとして働く卒業生の大学生3名を招き、体験を語っていただいた。「高等部での人権プログラムがきっかけで、障がいを持つ方々とかかわりをもつことができた」という3名の話に興味・関心を抱いた生徒は多く、複数名の生徒が部活動引退後、在学中にそのセンターの障がい者介助を手伝うようになった。人権プログラムが理論の学びで終わらず実践と結びついたこと、地域を核に、先輩から後輩に受け継がれる良い流れができたことは喜ばしいことであった。 ● 様々な制約の中、プログラムを縮小せざるを得なかったにも関わらず、問29「人権講座を中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育をおこなっている。」に対する生徒の肯定的評価は2019年度の84.0%から86.3%に増加した。また、問20「生徒自身が種々の人権問題について、より関心を持つようになったと家庭で感じる。」に対する保護者の肯定的評価は、55.4%から58.9%に増加した。これらの結果は、ここ数年の実践の蓄積や、地域を核とした様々な連携の一つの成果といえるかもしれない。また、オンラインなどで対面の関わりが例年より減少したにもかかわらず、問27「高等部の教育活動全体で一人ひとりの生徒の人権が尊重されている。」に対する生徒の肯定的評価は、87.7%から89.2%に増加した。 ● 昨年は教科と連携した3年間の人権教育シラバスを策定したが、今年前半は各教科がオンライン授業等への対応に追われる中、3年間の人権シラバスが作成できなかった。昨年構想していた教科横断的な人権プログラムも実施できず、その点では一步後退となった。しかしながら、限られた条件での試行錯誤や、個々の生徒の実情に合わせたプログラム実践が評価されたためか、問39「人権講座を中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育をおこなっている。」に対する教員の肯定的評価は2019年度の90.2%から96.2%に大幅増となった。 ● 休校期間の影響で、クラスやクラブ内の人間関係構築が遅かったであろうことを考慮し、例年9月に実施している生徒・保護者対象の「いじめアンケート」を3年生は10月、1・2年生は11月に実施した。ケースによっては学年団・人権教育推進委員会・カウンセリング委員会が協力し、情報を共有しつつ慎重に対応した。「高等部としていじめの問題を把握し、その防止に取り

	組んでいる。」という質問に対する生徒の肯定的評価は生徒が 80.1%、教員が 94.5%で昨年より増加したが、保護者は 80.3%でほとんど昨年と変わらなかった。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ● キリスト教教育・教科教育と連携した人権シラバスの再構築と、教科横断的な取組を行う。 ● 人権プログラムの策定する。 ● 新型コロナウイルス感染拡大の中で浮かび上がった新たな人権課題（差別・偏見）への対応と、オンラインを含めた生徒への新たな発信方法の検討する。 ● 希望者を募った実践的アクティビティ（施設訪問・フィールドワーク等）の模索する。

評価項目 【テーマ】	国際理解教育 【国際的な諸問題を含む国内外の社会的課題の解決への関心・意欲の育成】（重点）	自己評価	B
目標	<ul style="list-style-type: none"> ● 文部科学省から採択を受けた2年目のWWLコンソーシアム構築支援事業（以下WWLC）に関わる授業や活動、学校全体の様々な教育活動を通して、SDGsに代表されるような国内外の社会的課題の解決に主体的に関わろうとする姿勢や、多様な価値観を学ぼうとする意識を育む。 ● 国内外で開催される国際交流プログラムを紹介し参加を促すことを通して、国際理解に関わる学びを深める機会を提供する。 ● 中期・長期留学、海外語学研修、海外フィールドワークなどといった海外での活動への参加を促し、本校でも留学生を積極的に受け入れることで、学校内での国際交流の場を作り出す。 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取組の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本年度については新型コロナウイルス感染拡大のために様々な教育活動が制約され、国際交流関係においても安全面、健康面を考慮して、予定していた様々な活動を中止せざるを得なかった。留学関連については、本年度の留学出発者は0名、本来予定されていた9月からの留学出発も来年度に延期、留学選考についても中期留学選考は中止し、来年度の長期留学者を1名選考するに留まった。また、留学中であった3名の生徒たちも留学を途中で切り上げ緊急帰国を4月に余儀なくされた。夏休みの海外語学研修、海外フィールドワークも同様に中止とした。本校に1年間迎え入れる予定であった2名の海外留学生も来日がかかわらず、海外と直接対面するような活動が一切できない1年であった。 ● 上記のような状況であったが、本校の取組として、夏休みにオンライン会議ツールZoomを利用したオンライン海外留学、オンライン海外フィールドワーク（フィリピン）を企画、実施し、それぞれ18名、8名が参加した。また、海外提携校のBrisbane Boys' Collegeと企画した、将来的にはオンラインでの交流を予定しているLetter Exchangeプログラムには12名が参加している。関西学院大学が主催した他校の高校生、日本にきている海外からの留学生とのオンライン国際交流イベント「SDGs Ideathon2020」には3名が2日間に渡って参加した。また、関西学院大学とハーバード大学の学生との5日間にわたるオンライン授業・ディスカッション企画「ハーバード大学×関西学院大学交流事業2021」にも2名が参加し大きな成果を得た。また、3月に開催される関西学院大学などが主催の「WWL・SGH×探究甲子園」にもWWLC・SGHを受講する生徒が4名応募し、探究活動プレゼンテーション部門、グル 		

ープディスカッション部門の両方で1次審査を通過し、参加できるようになった。コロナ禍にあっても積極的にオンラインでの国際交流プログラムに取り組もうとする生徒たちの姿が見られた。

- 2014年度からの5年間にわたり文部科学省から採択されたスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）事業を継続した3年生の選択授業Global Study IIIが今年度も開講された。インドの高校生とのスカイプを用いた課題解決学習に取組、多様な価値観に触れる機会を得ることが出来た。
- WWLCにおいてもオンライン会議ツールを用いた活動が多く取り入れられた。2年選択必修授業グローバルスタディ（GS）科目においてはフィリピンのNGOと数回にわたり環境問題、またその解決方法についてZoomを用いて意見交換をするなど国際的な視点を得ながら学びを深める授業が展開された。11月には他の2年選択必修授業であるハンズオンラーニング科目、AI活用科目、GSの3科目が合同で、全国のWWLC連携校に呼びかけ、生徒が主体となって「SDGsオンラインミーティング」を企画、運営、開催した。生徒実行委員会を立ち上げSDGsに精通する著名な講師2名も生徒たちが交渉し、またディスカッションの進行や司会、授業報告会も自分たちで行うなど、100名ほどの生徒たちが社会課題の解決に関する学びを深めることができた。今年度の3月、来年度の6月、8月には、これの国際会議版を3回にわたって開催をする予定にしており、アジアの国々の高校生たちと英語で国際問題についてディスカッションを行う。コロナ禍だからこそ逆にオンラインツールを用いて積極的に学外の人たちとつながることができた。
- 1年生のWWLC Basicの授業を含むWWLCにおいては、社会課題を実際に解決する企業やNPO、NGOなどを実際に訪問、あるいはそれらの組織や関西学院大学から専門家を講師として招く、オンラインでお話を聞くなど、学外からの学びを多く得ることが出来た。コロナ禍で様々な制約があったとしても直接つながる機会を生徒たち自身が作り出すことが出来た。

（取組の効果に対する評価）

- 「授業や行事を通じて国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる（生徒）/高める努力をしている（保護者・教員）」という項目について、生徒（問30）は75.0%（昨年比+1.7）、保護者（問21）は72.3%（昨年比-3.0）、教員（問40）は90.6%（昨年比-3.6）の肯定的な回答を得た。昨年度とほぼ変わらない水準であるが、コロナ禍であるからこそ海外の動向や価値観について更に関心をもち、自国について見直す機会を様々な授業などの活動を通して提供していくことが求められると感じる。
- 「授業や行事活動で、語学力や国際性を身につけることができるプログラムなどが高等部で提供されている。」という項目について、生徒（問31）は77.9%（昨年比+1.2）、保護者（問22）は70.7%（昨年比-4.5）、教員は90.6%（昨年比-5.5）となっている。比較的高い水準を保ちつつも、保護者、教員で減少となっているのは、海外語学研修に代表されるような実際に対面する行事、活動などが中止になってしまったからだと思われる。オンライン英会話を3年生の英語の授業で実験的に導入するなど試みたが、このような状況であるからこそ、そのようなオンラインを用いた学びの機会や交流プログラム、国内で実施されている国際・語学研修プログラムなどを今後は積極的に開発、提供していくことを来年度の課題としたい。また、別の課題としてはWWLCなど個別の授業を通して特定の生徒たちにはアプローチはできたものの、学年全体、学校全体を巻き込んだ行事やプログラムにはまだなりえていないことが挙げられる。今後取り組んでいきたい。

	<ul style="list-style-type: none"> ● 「将来、機会があれば留学や渡航をしたいと感じている(生徒)/意欲を育てている(保護者・教員)」という項目について、生徒(問32)は72.9%(昨年比±0)だったものの、保護者(問23)は56.1%(昨年比-9.2)、教員(問42)は約75.4%(昨年比-22.5)に留まった。本年度の留学出発や海外語学研修などについては、生徒の安全面、健康面を考えると中止するなど消極的にならざるを得ないことがあったためだと考えられる。来年度においては、コロナ禍であっても将来的には海外に行きたいという意欲を高め、またその機会のための準備を前向きに行えるような取組を展開していきたいと考える。 ● 「授業や行事などを通して、生徒が社会的課題に対して関心を持ち、取り組もうとする姿勢を育てている。」という項目については、生徒(問16)や72.7%、保護者(問9)は約76.6%と、比較的高い肯定的な回答を得た。WWLCや国際交流部などの学校全体的な取組を通じて、学校内だけでなく学校外にも生徒たちの視野を広げていきたいと考える。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● WWLC構築支援事業などを足掛かりにして、国際理解を含む広い意味での社会的課題やそれらの解決に対する関心、興味を高め、実際に生徒たちが関わっていけるような取組を展開していきたい。個別の授業やプログラムを通してだけでなく、学年全体、学校全体として取り組めるような行事などを模索する必要がある。 ● 新型コロナウイルス感染拡大は、留学を含む来年度の国際理解活動にも大きく影響すると思われる。オンライン会議ツールを用いた代替的な国際交流プログラム、あるいは国内での国際交流プログラムをさらに積極的に提供していく必要がある。そうすることで、将来的な留学、海外渡航、国際的な諸問題への関心・意欲を高め、国際理解を積極的に図ろうとする姿勢を育てているのではないかと考える。

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

今年度は新型コロナウイルス感染症に伴う様々な制限や制約の中での教育活動であったため、担当部署や質問への回答にはその影響を多少なりとも受けていることを前提としての評価である。ただ、当初予想していたよりも生徒・保護者共に高等部の新型コロナウイルス感染拡大防止対策を受け止め、その対応への理解を示していただいていることが伺える結果でもあった。生徒と教職員が一体となって、このコロナ禍の制限・制約の中でできる限りのことを創意工夫を重ねて高等部の教育活動の歩みを止めず、進めてきたことの証でもあると考える。

生徒・保護者・教員ともに関西学院でのキリスト教主義教育の理念が今年度も概ね共有され、高等部教育において重要な位置づけにあることが理解されていると言える。全校礼拝をチャペルで持つことができず、讃美歌も歌えない状況ではあるが、これまで堅持してきた高等部のキリスト教主義教育がしっかりと根付いていることの証左と考える。また、つらい環境にあるからこそ、他の災害などにも共感ができる生徒が多かったことが、献金などの活動にもつながったと言える。

教育課程・学習指導に関しては、大きくコロナ禍の影響を受けているところであり、手探りの状態から始めた前年度3月からの休校措置、そして今年度1学期の長期にわたるオンライン授業の評

価が気にかかる場所であったが、教育アプリでの学習で知識の伝達、そして、オンラインでの授業では高等部らしさを前面に出したことが功を奏し、生徒の満足度も高かった。これは今年度より幸いにして、全生徒が iPad を持つことになっていたことがオンライン授業に切り替えることのできた大きな要因でもあり、また早い段階で双方向授業の通信アプリを利用したこともその結果につながったと言える。また、教員の ICTリテラシーの違いを、若手教員を中心にチームで支えてカバーしたことも大きかった。図らずもオンライン授業導入となったが、この授業を通して教員が経験したこと、得たことは大きく、今後の教育の在り方に大きなインパクトを受けることとなった。総じて生徒の授業内容理解や興味・関心についてはこれまでと大きな違いはなかった。

このままこの状況が続くと「探究型」の教育活動におけるグループワークなどに影響が残るが、現在文科省事業を通して実証実験をしている主体的な学び・探求型の学びについては引き続き研究を深めていきたい。

また、進路、関西学院大学への接続に関する情報については、その伝達機会を大きく逸したが、生徒は情報を得られているという実感を持っていることで安心があるものの、保護者には生徒同様、「C l a s s i」を通じて高等部の方針や情報を発信していたものの、オンライン授業も含めて十分に理解されていない、あるいは届いていないことが分かり、今後さらに丁寧な保護者向けの情報発信を心掛ける必要がある。

生徒指導面においては、今年度は特に感染症拡大防止のために多くの労力を費やすこととなったが、これまでに経験したことのないことに対して、的確な情報収集に努め、感染症防止対策を講じながら活動を少しでも前に進めるためのガイドラインを積極的に策定し、生徒の安全確保と教育活動の保証に努めることができた。また、ICT機器利用、SNSの利用が高まる中でその使用についてや、制服の着用についてのマナーの向上については適切な指導がなされている。教員の問題行動についての情報共有などでのアンケート結果が昨年度より下がっているが、全教員が集まる機会が極端にコロナ禍で減ったことが影響していると考えられる。生徒・保護者はおおむね高等部の対応に理解をしているが、教員間での情報共有の方法については再考しなければならない。

教育環境に関する質問に対しては生徒・保護者・教員の多くが整備されていると回答し、満足感を得ている。ICT環境が整ったなか、前述のようにオンライン授業を通して、教員が教育活動におけるICT機器活用・運用能力が向上したことがわかる。さらに教育活動に生かしてアクティブラーナーを育成する授業研究を深め、授業での深い探究へとつながるソフト面での整備が今後の課題である。

人権教育もグループワークや学年全体が集まってできる活動に大きな制限が生じたために、当初の計画されたことが実行できず、目標を達成しえなかったところがある。しかし、その中でも様々なアプローチを施しながら人権教育を実施したと言える。特にこのコロナ禍だからこそ考えるべき人権問題に、教員、生徒ともに意識を及ぼすことができたこと、さらにそれを保護者が感じることができるといった肯定的評価の高まりは、高等部全体での人権教育の成果と捉えていいと考える。今後、この状況がまだ続くと生徒の中に精神的不安定さが増していくことは容易に考えられることから、引き続きそのフォロー体制を築いていく必要がある。

また、今年度は人権講座にとどまらず、礼拝を含めてLGBTQに関することを扱ったことを契機に、さらにインクルーシブ、ダイバーシティがあるコミュニティ作りの進めていくことが、今後の高等部教育にはますます肝要となる。

文科省指定事業、ワールドワイドラーニングコンソーシアム(WWLC)支援事業が2年目を迎え、その事業に沿ったカリキュラムの一部改編も進んだが、大きく海外との交流自体が完全に止まってしまったことは、来年度に国際会議開催が義務付けられているところでは大きな打撃であった。しかし、その中ではあるが、国際交流コーディネーターの多大は協力もあり、オンラインでの授業や国際交流などのプログラムが実現し、オンラインだからこそつながることができる経験もでき、また新たな展開が実践できた。ただ、保護者には十分にそのような活動は伝わっていないことから、高等部での取組の評価は下がっている。そして、全校を巻き込んだ大きな活動にはまだ至っておらず、最終年度を迎える来年度は、WWLCで得た成果が引き続き高等部で一つの軸となる教

育活動になりえるための重要な一年となる。

この事業を通しての教育活動をしてこに進めていた、高等部としてのすべての教育目標策定作業がこのコロナ禍で、全教員が集い、議論する場を持つことができず止まったままとなっている。コロナ禍が終息すれば、すぐにでも来年度は再開していきたい。そして、この事業のテーマでもある「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」をもって関西学院がめざすところのグローバルリーダーである「Mastery for Service を体現する世界市民」の育成にしっかりとつなげていきたい。

2020 年度の評価をふまえて 2021 年度に予定している評価項目、テーマ等

2021 年度は、評価項目としては、高等部の教育の土台となる「キリスト教主義教育の実践」はもちろんのこと、学習内容の中心となる「教育課程・学習指導」の項目、「生徒指導」「人権教育」も評価項目として設定する予定である。また、WWL C 事業が最終年度になることから、今後につなげるための評価項目の設定や P D C A サイクルに適した評価項目になっているかの検証を得て、必要な評価項目の変更も検討する。男女共学を意識した評価項目を設定していたが、共学化が定着したことから、インクルーシブでダイバーシティなコミュニティの実現に向けての評価項目を見直し、ウイズコロナ・ポストコロナの時代に即した教育環境を整えるためのテーマ設定・評価項目の新設を検討する。

第三者評価／学校関係者評価

新型コロナ感染症拡大の多大な影響の中にあっても、様々な工夫を施しながら高い教育成果を上げていることが評価できます。定着したキリスト教主義教育が、今後も生徒、教員、保護者の三者が連携・協力し、礼拝、ボランティア活動、人権教育などと一体化して展開されていくことが期待されます。また、共学化の定着とコロナ禍に対応したインクルーシブでダイバーシティな教育活動の一層の充実が望まれます。教育課程・学習指導については、iPad と Z o o m などを使用したオンライン授業の実施によって困難な状況に対応し高い教育的効果を得ていること、さらに関西学院大学への推薦制度を前提にした学力下位層の生徒への英語・数学を中心とした基礎学力の向上を目指した丁寧な指導が、特に評価できます。今後、さらなる指導体制の充実、加えて2年目を迎える WWL (ワールド・ワイド・ラーニング・コンソーシアム) コンソーシアム構築支援事業などを通じて学力上位層の学力向上が期待されます。なお、高等部を訪れる機会が減少している保護者向けの進路ガイダンスについては、We b 環境を活用した情報提供の方法も考えられます。生徒指導については、例年通りの取組に加え、生徒の心身の安全を図るための適切な感染症対策が実施されたことを高く評価します。今後も、コロナ禍に関連するいじめなどの問題行動の防止などの取組が期待されます。教育環境整備については、I C T 環境整備・運用が順調に進み生徒・教員さらに保護者からも高い肯定的意見が示されていることが評価できます。今後も、WWL コンソーシアム事業をもとに、アクティブラーニング型授業・P B L (Project Based Learning) 型授業の展開など、先進的な実践内容を対外的に発信する中で、高等部独自のアクティブラーナーの育成が期待されます。国際理解教育に関しては、WWL 事業に基づく様々な取組がコロナ禍の影響で展開できなかったにも関わらず、オンライン環境を活用して臨機応変な対応を実施したことを高く評価します。なお、既に自己評価に含まれていますが、とても意義ある実践内容であるため、保護者への情報発信を丁寧に行うことが望まれます。

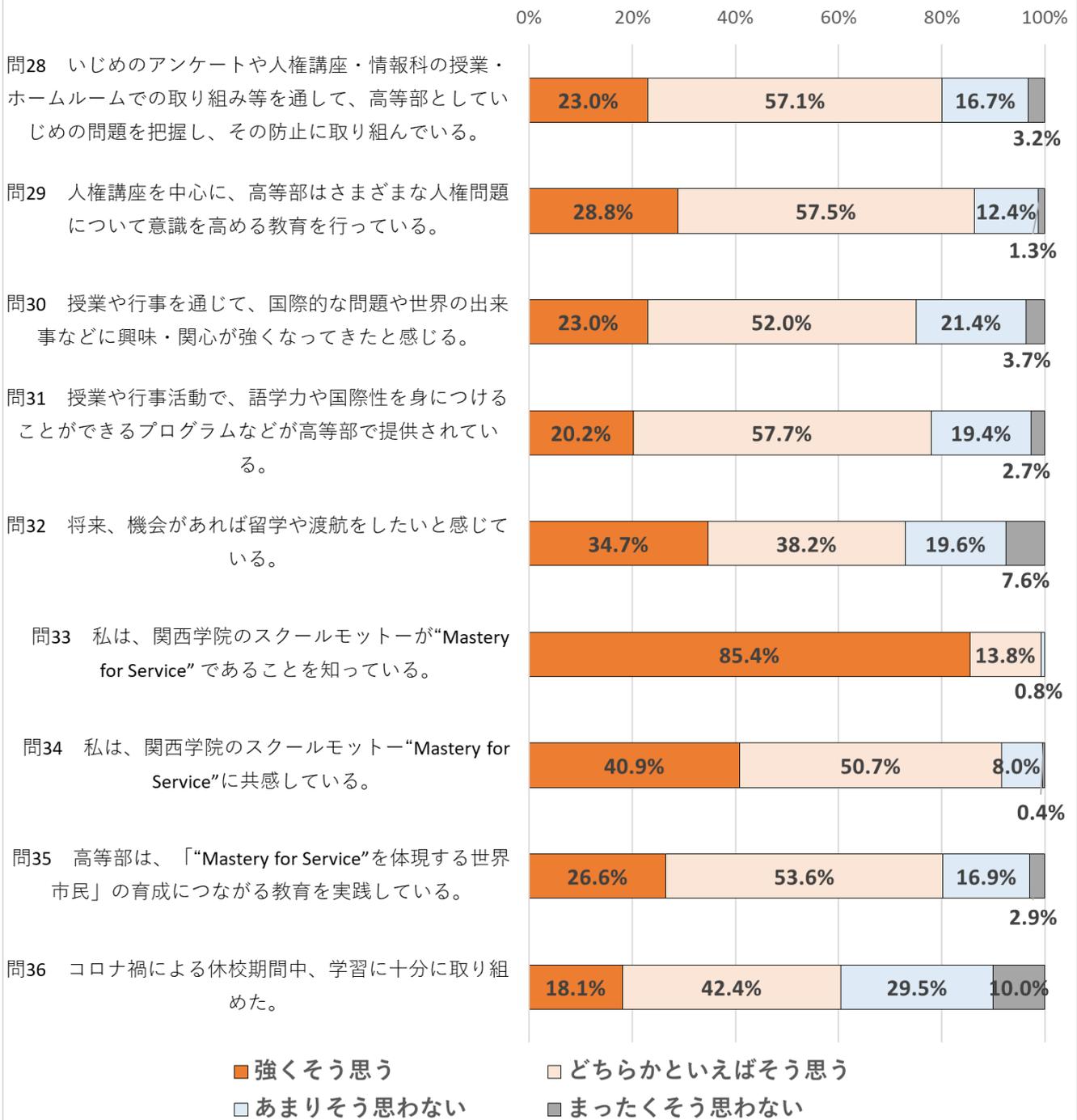
新型コロナ感染症拡大による緊急事態にも関わらず、2020 年度の高等部の教育活動全体が総合学園としての関西学院における一貫教育の中核として先進的かつ積極的な教育実践が展開されてきたことを高く評価します。なお、次年度は共学化後の高等部卒業生が大学4年生となり、社会人となる準備に入ります。このことも踏まえ、ともに中等教育を担う関西学院中学部および千里国際中等部・高等部、さらに初等教育を担う関西学院初等部との連携・情報交換を一層強化することでより大きな推進力となるとともに、Society 5.0 時代に対応した“Mastery for Service”を体現する世界市民を育成していくことが今後も期待されます。

まずは総合的に、生徒・保護者の学校生活への満足度が非常に高いということが第一印象です。教職員の日々の丁寧な取組が生徒達に伝わっていること、厚く安定した信頼が寄せられていることがうかがえます。高等部のこれまでの建設的で組織的・継続的な取組が今年度のコロナ禍にあっても変わらず発展している、あるいは、コロナ禍にあっても実現できなかった事項であってもその精神が普遍的に浸透している、ということが強く感じとられ、そのことが何よりも高く評価できるものと考えます。感染症の拡大という想像もしなかった困難に見舞われ試行錯誤の連続であったこの1年を思うと、学校評価アンケートでこのような肯定的な結果を確認できたことは感動さえ覚えるものであり、高等部の先生方の「学びを止めない」姿勢でのこの1年間の真摯な取組に敬服いたします。

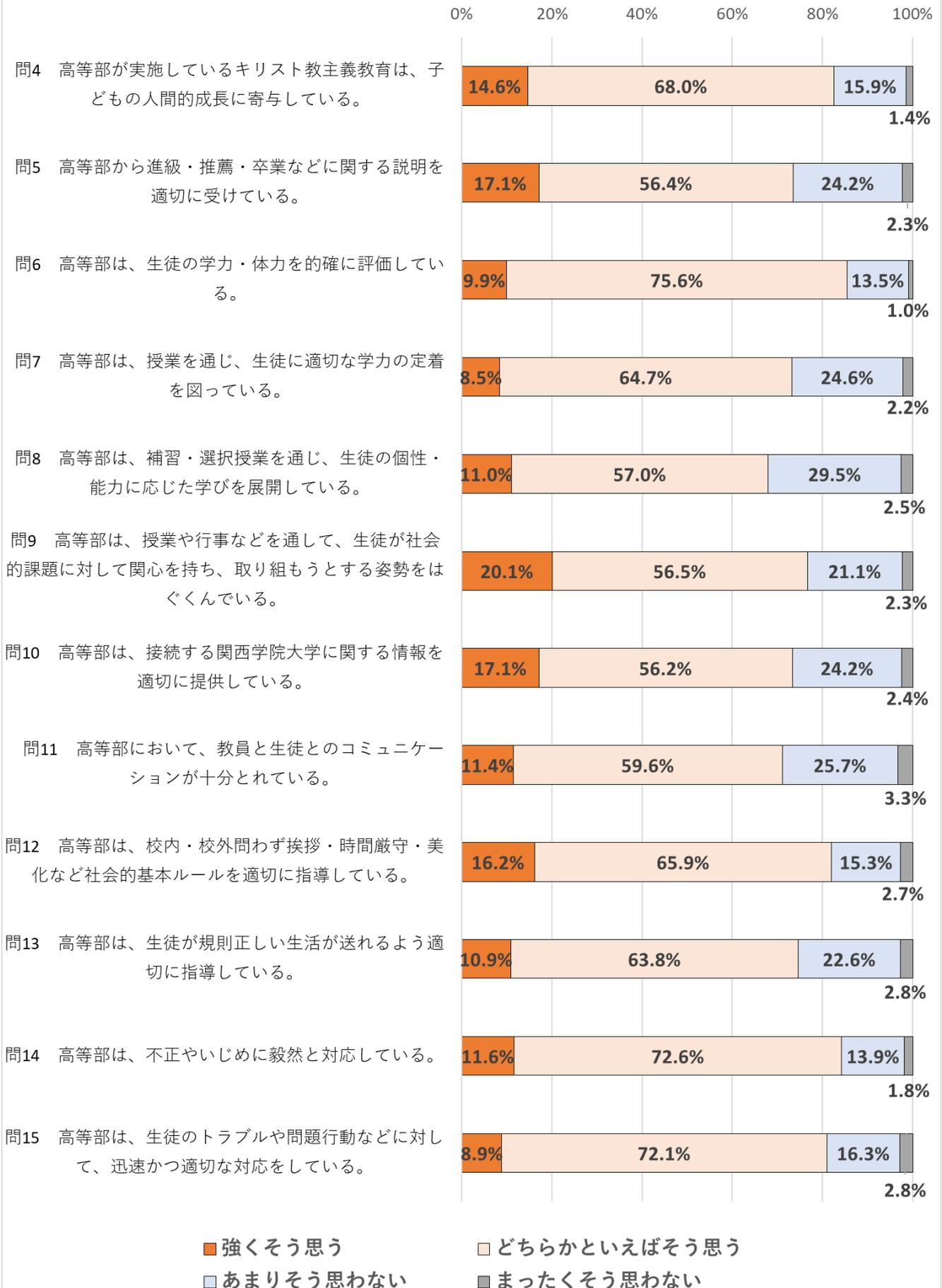
昨年度との比較において、差異のある質問事項はほとんど見受けられませんでした。その中で昨年と同様に（さらに言えば、過去少なくとも5年間変わることなく）特に生徒と保護者の満足度の高い項目として、「3年生の選択授業の充実」と「施設の充実・ICT環境の整備」が際立っています。多くの生徒が接続の関西学院大学に進学する環境において最終学年での大学につながる学びがこれほどの満足度を得られるまでに充実していることは、研修を重ねてICT活用、アクティブラーニング、PBL、教科横断型授業を展開されてきたことの成果であり、高等部の大きな強みであると思います。また、施設の充実に関する満足度の高さも（少なくとも私が第三者評価委員として存じ上げる）5年前から変わらず際立っていますが、特に今年は、一人一台のデバイス環境が整い、「奇しくも」新学期早々にオンラインへの移行を余儀なくされましたが、施設・ICT環境への満足度が変わらず高く評価されていることに加え、生徒アンケートの「興味深い授業がある。」との問いへの肯定的回答が昨年比で大きく伸びています。このことも、オンライン授業に対応する教員のチームワークと創意工夫の結実といえるものであり、教育面での安定しての発展がアンケート結果からも明らかになっている点は高く評価できるものです。

高等部の教育の基盤であるキリスト教主義教育、その教育目標の中に「豊かな心と真摯な態度を備えた人格」という表現がありますが、これはコロナ禍を経た今、中等教育に携わる誰もが、まさにこの時代に大切にすべき人物像であることを一層強く感じていることといえると思います。高等部が今後コロナ禍が終息するまでの期間も、その後のポストコロナの時代においても、キリスト教主義を土台に、なお一層丁寧な全人教育の展開、時代に対応した学習活動の発展に取り組まれることと期待しております。

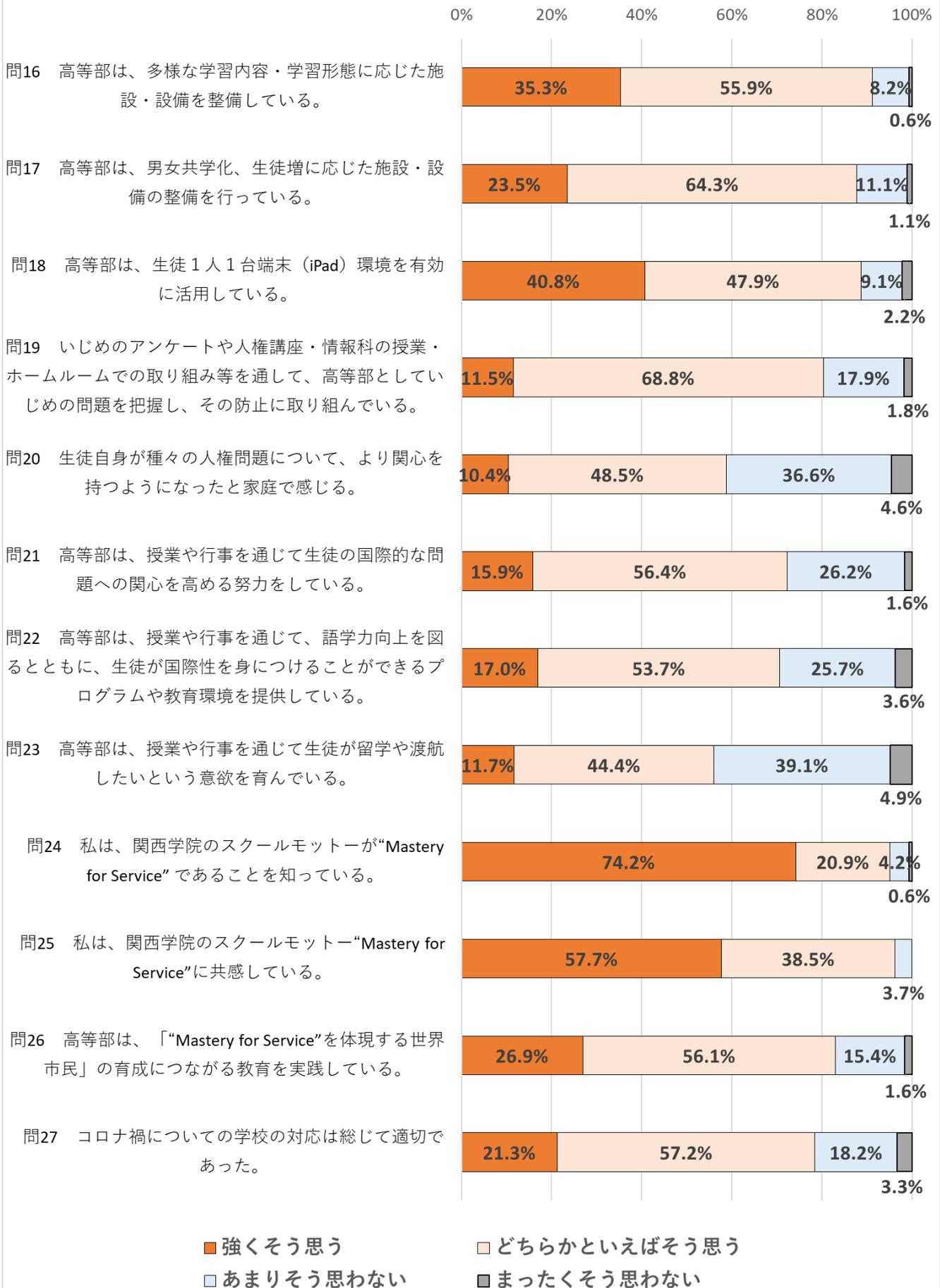
2020年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・生徒 (回収率 98.9% 1,127人/1,140人中)



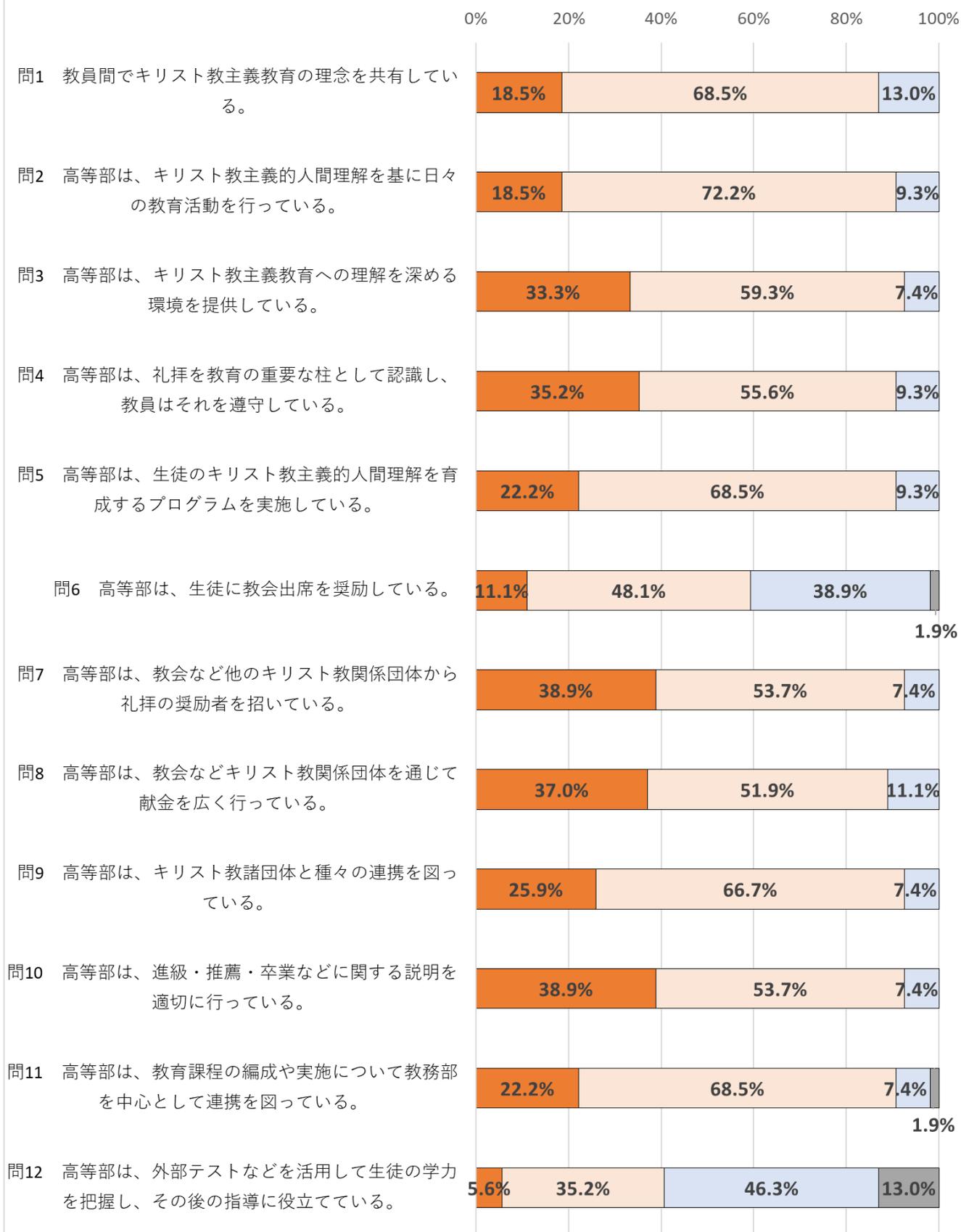
2020年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・保護者 (回収率 73.0% 832人/1,140人中)



2020年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・保護者 (回収率 73.0% 832人/1,140人中)

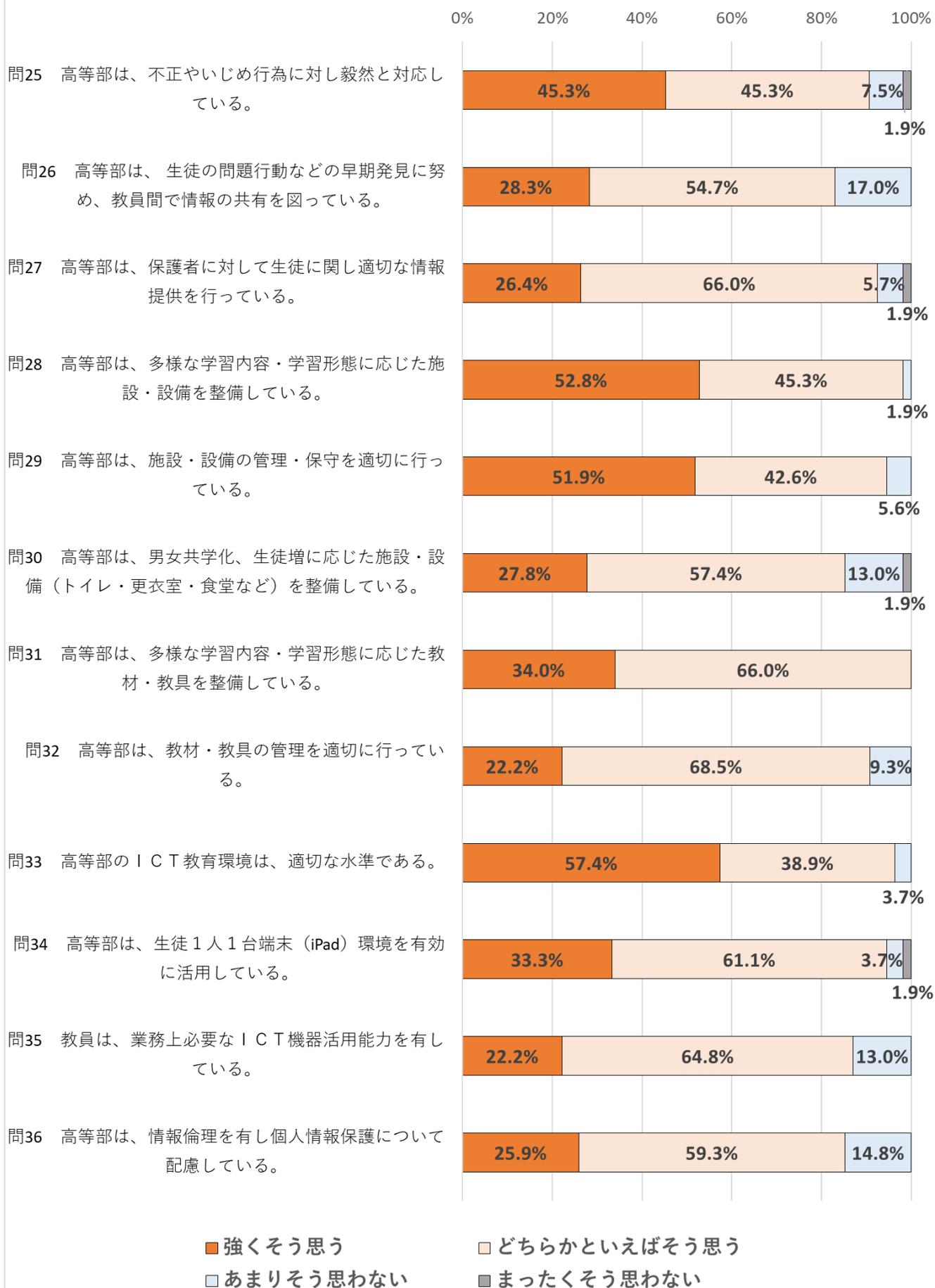


2020年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・教員 (回収率 100% 54人/54人中)



■ 強く思う ■ どちらかといえば思う
■ あまりそう思わない ■ まったくそう思わない

2020年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・教員 (回収率 100% 54人/54人中)



2020年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・教員 (回収率 100% 54人/54人中)

0% 20% 40% 60% 80% 100%

